

保井コノ資料目録

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター

保井コノ資料目録

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター

2004(平成16)年3月



序

本書は、日本の女性博士第1号となった保井コノ(1880-1971)の資料目録である。保井コノは、女子高等師範学校研究科修了後、27歳で助教授に就任し、39歳で同校教授となり、47歳で東京帝国大学から博士号を授与された。このような保井の軌跡は、保井が旧制の教育制度にあって、女子の最高学府と称せられた「女高師」という教育機関の存在意義を示す「象徴」とも言うべき存在であったことを痛感させる。1900年前後に、女高師は、文科、理科、家政科の三分科制や研究科を設置し、より高い学問的志向性をもって制度改革を実施する。保井は、分科制の理科第1回生であり、研究科の第1回理科「官費研究生」であり、常にその改革の第1期生として在った。早くから植物学の研究に着手し、細胞学、遺伝学への関心を深め、論文を発表した。1902年に藤井健次郎東京帝国大学教授は、海外の研究者に「日本でたった一人の女性植物学者」と保井を紹介している。博士学位論文は、「日本に産する亜炭、褐炭、瀝青炭の構造について」と題する石炭の研究であった。本目録には、保井の研究姿勢を示す好資料である、直筆の緻密な炭層柱状図を収録している。また、細胞学の国際的学術雑誌『キトロギア』の創刊とその後の発展にも関わった。保井は、自分の研究を、発生学、形態学、細胞学、遺伝学の集大成として進化の問題、種の変異を考え、一生を通じて「系統」を研究したと述べている。

なお、保井は、戦後の女子高等教育推進の役割も担った。東京女高師が国立女子大学、お茶の水女子大学として設置される際の新制大学設置準備委員会委員長として尽力し、1949年69歳の時に同大学教授となり、1952年に退官して同大名誉教授となった。

本目録に収録された保井コノ資料は、日本の学問史上初の女性博士となることが出来た要因の解明を促すものであり、今日の日本の大学の社会的、学術的役割を再考するためにも極めて示唆的なものとなりえるであろう。

その意味で、保井コノの資料が本学にきちんと保存されていなかったことは、

あまりにも残念であった。本資料目録に掲載された保井コノの資料や遺品は、本学の団ジーン教授や今井百里江子教授が保管に務めてきたことにより、かろうじて受け継がれた。また、1981年に、ジェンダー研究センターの前身である女性文化資料館が主催した「お茶の水女子大学の歴史と女性研究者の歩み」展に出品のため、筆者と能村推子教授が姪の保井和子氏を訪ね、保井コノ博士の妹である保井マサ氏が和子氏に託した資料を拝借した。その遺品の中から研究に係わるものだけが、後日寄贈され、ジェンダー研究センターで保存してきた次第である。

そして、保井コノ博士が没してから33年、東京女子高等師範学校時代の教え子である、三木（広重）寿子元神奈川歯科大学教授の資料整理と研究の結果、ここに資料目録を刊行することができたことは何とも感慨深いことである。ご自身の研究が多忙な中、このような貴重な作業に従事して下さった三木寿子教授に心から御礼を申しあげる次第である。また、湯浅年子博士の膨大な資料整理と目録刊行の仕事と共に、保井コノ資料の整理にもあたって下さった松田久子氏の長年の努力に敬意を表するものである。本目録の最後の編集の際には、小山直子客員研究員が大変な労力をかけ、検証をして下さった。記して感謝の意を表したい。

日本の女性博士第1号である保井コノの生涯やその存在の意義については、これまで論じられることが思いの外少なかった。本資料目録が、日本の女性自然科学者研究を発展させ、次世代にメッセージを送り得るものとなることを期待している。

2004年3月30日

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授
館 かおる

資料番号について

『保井コノ資料目録』をまとめるにあたり、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターに保管されている保井コノ関係の資料を分類し、資料番号をふり直した。

この目録に載せるアルファベット (YK) を冠した4桁の数字はその資料番号である。